

# 小笠原諸島のエコツアーにおける心理的リアクタンス

服部 陽太（首都大学東京 都市環境科学研究科 観光科学域）  
杉本 興運（首都大学東京 都市環境科学研究科 観光科学域）  
菊地 俊夫（首都大学東京 都市環境科学研究科 観光科学域）

## 要 約

本報告は小笠原諸島において、エコツアーで特定の行為が制限された時に観光者に心理的リアクタンス（反発心）が生じるかを検討した。エコツアー参加者を対象としたアンケートの結果、心理的リアクタンスはほとんど生じていなかった。その要因として、行為を制限する理由がツアーガイドによって説明されていたことがあげられた。また、小笠原諸島ならではの特異性から心理的リアクタンスが生じていなかったこともあげられた。小笠原諸島は世界自然遺産に登録されており、自然資源が保護や保全の対象であることが観光客に認知されている。また、小笠原旅行の困難さから、負の側面である行為の制限を美化していることも考えられた。

## I. はじめに

第2次世界大戦後、マスツーリズムという形態で成長し続けていた観光産業が、1980年代前半に停滞期を迎え、観光業者は新しい旅行を創出しようとした。また、観光客はマスツーリズムに満足できず、自然環境、文化遺産、生活文化などへと興味の嗜好を変えていった。観光客の需要と観光業者の供給が一致した結果、マスツーリズム停滞以前は利用されてこなかった自然環境を観光資源として利用するようになり、エコツーリズムが発展した。エコツーリズムは単に自然環境を利用する観光形態ではなく、自然を観光資源として利用するが、同時に資源を持続的に利用できるように自然資源を保全していく観光形態である。

しかし、エコツーリズムがおこなわれている現場では自然環境を利用することに重点が置かれ、持続的に資源を利用できるように自然資源の保全を図ることは軽視されていることが多い。いわばエコツーリズムはマスツーリズムの延長として自然を体験・鑑賞する旅行となってしまっている。エコツーリズムではしばしばオーバーユースの問題が取り上げられている。オーバーユースとは、自然環境が受け入れられる容量を超えて人に利用されることで自然へ負の影響を与えてしまうことである。世界自然遺産になることやメディア

に取り上げられることで観光地が有名となると、観光客が急増し、土地が過剰に利用されてしまうのである。オーバーユースの問題を踏まえ、自然資源を持続的に利用するために資源管理施策を実施している地域がある。資源管理施策では、特定の地域に入れる人数の上限を決める人数制限、特定の地域に入る際に徴収する環境負担金、特定の行為の制限の3つが主におこなわれている。しかし、これらの資源管理施策は必ずしも実施されるわけではない。世界自然遺産である屋久島では、縄文杉へのトレッキングによって登山道へのオーバーユースが発生していたため、1日あたりの人数制限を設ける条例案が議会に提出された。しかし、人数制限をすることで年間約2億3千万円の宿泊関連売上が減少するという試算が出されたため、この条例案は全会一致で否決された。屋久島の事例のように、資源管理施策は観光振興に反することもある。

自然物採取などの特定の行為の制限を実施している地域もある。しかし、山田（2005）は行動規制によってレクリエーションの質が低下しないようにすることは重要であるとし、その際に心理的リアクタンズ理論を考慮するべきであると述べている。心理的リアクタンズ（心理的反発）とはBrehm（1966）がその存在を指摘した理論であり、「自由を制限されたり脅かされたりするとその自由を回復しようと思うこと」である。山田（2005）は心理的リアクタンズが生じるとレクリエーションの質が低下してしまうと述べている。つまり、エコツーリズムの現場では「観光客の行為を制限することで観光客が制限された行為をしたいと思う状態」となると心理的リアクタンズが生じており、観光客のレクリエーションの質が低下してしまうといえる。しかし、心理的リアクタンズがエコツーリズムの現場で生じているかの検討はいまだ足りていない。今城（2009）は奄美大島で「絶滅の危機」という情報が心理的リアクタンズを生起させるか否かを調べたが、その生起構造は明らかとなっていない。

本研究では、エコツーリズムの現場で資源管理施策のうち特定の行為の制限によって観光客に心理的リアクタンズが生じているか否か、そしてその要因を小笠原諸島のエコツアーを事例にして明らかにすることを目的とする。

## Ⅱ. 研究手法

### 1. 研究対象

#### (1) 研究対象地

エコツーリズムの現場で心理的リアクタンズが生じているか否か要因を明らかにするために、2011年に世界自然遺産に登録された小笠原諸島を研究対象地として選んだ。小笠原諸島では、専門のツアーガイドが自然環境のことを観光客に説明しながら周遊するエコツ



図1 陸域ツアーの様子（2015年3月撮影）



図2 ドルフィンスイムの様子（2015年3月撮影）

ツアーが盛んである。小笠原諸島のエコツアーは大きく2つに分けられる。1つ目は陸域におけるエコツアーである。小笠原諸島には固有の植物種や動物種が生息している。陸域ツアーはツアーガイドが固有生物について解説しながらトレッキングをしたり（図1）、眺望のよい展望台などをツアーガイドが運転する車で巡るものである。2つ目は海域におけるエコツアーである。小笠原近海にはザトウクジラやハシナガイルカをはじめとする海洋性哺乳類が生息しており、観光客はホエールウォッチングやイルカといっしょに泳ぐドルフィンスイム（図2）などを体験できる。また、サンゴが群落をなしている海域もあり、



図 3 南島を代表する景観 (2015 年 3 月撮影)

観光客はシュノーケリングを楽しむこともできる。小笠原諸島の中心の島である父島の南西に浮かぶ無人島の南島は景勝地として人気が高い (図 3)。海域でおこなわれる「海ツアー」は海洋性哺乳類の観察、シュノーケリング、南島への上陸などをツアーガイドが操船する船に乗って楽しむものである。船に乗らないと海域におけるアクティビティができない点、陸域はツアーガイドが同行しないと立ち入ることができない保護地域が多い点などから、エコツアーに参加する観光客は多い。そのエコツアーにおいて、いくつかの資源管理施策が実施されている。資源管理施策には人数制限もあるが、特定の行為の制限が多く、エコツアーに参加する観光客に心理的リアクタンスが生じている可能性がある。

## (2) 研究対象となる制限

本研究で研究対象とする制限は森林生態系保護地域内で課せられる制限とした。小笠原諸島のエコツアーにおいて特定の行為の制限は多くおこなわれている。たとえば、「海ツアー」では、海洋性哺乳類への負荷を軽減するために船の侵入区域が制限されている。しかし、このような行為の制限はガイドによってコントロールすることができる。エコツアー参加者が制限された行為をしたいと思ってもすることができないため、心理的リアクタンスが生じるとはいえない。一方、森林生態系保護地域内で課せられる制限ではエコツアー参加者が制限された行為をしたいと思えばすることができる状況であるため、心理的リアクタンスが生じると考えられる。森林生態系保護地域は保護林制度に基づく地域であり、保護地域内への立ち入りには認定されたガイドの同行が必要である。森林生態系保護



図4 粘着ローラークリーナー（商品名：コロコロ）を使った種子除去の様子（2015年3月撮影）



図5 食酢を靴底に吹きかける様子（2015年3月撮影）

地域内で課せられる制限は、(1)「規定ルート以外の通行禁止」、(2)「自然物の採取禁止」、(3)「外来種対策の作業をする」の3つである。(3)「外来種対策の作業をする」は保護地域内に外来種を持ち込まないようにするための作業のことである。保護地域の入口には専用の設備があり、そこでする作業は主に (i)「マットで靴底の泥を落とす」、(ii)「粘着ローラークリーナー（商品名：コロコロ）を使って足についた種子を取り除く（図4）」、(iii)「外来種のニューギニアヤリガタリクズムシへの対策のため靴底に食酢のスプレーを吹きかける（図5）」である。

### (3) 研究対象エコツアー

研究対象としたエコツアーは森林生態系保護地域に入るエコツアーのうち、「海ツアー」、「森山歩きツアー」、「ハートロックツアー」の3つである。

「海ツアー」は1日かけて父島周辺を船で周遊するツアーであり、海洋性哺乳類の観察、シュノーケル、南島への上陸などが組み合わさったツアーである。複数あるアクティビティのうち「南島への上陸」の時のみ森林生態系保護地域に入るので、「南島への上陸」が本研究の対象となる。南島は父島の南西に浮かぶ無人島であり、その景観の美しさから観光客からの人気も高い島である。先述した保護地域内の3つの制限のうち、(3)「外来種対策の作業をする」は (i) から (iii) までの作業ではなく、「海ツアー」の冒頭船に乗り込む前、もしくは南島に上陸する直前に、「ブラシに海水をつけて靴底の泥を落とす」作業が課せられる。南島内は砂浜地を除き敷石により経路が設定されており（図6）、「規定ルー

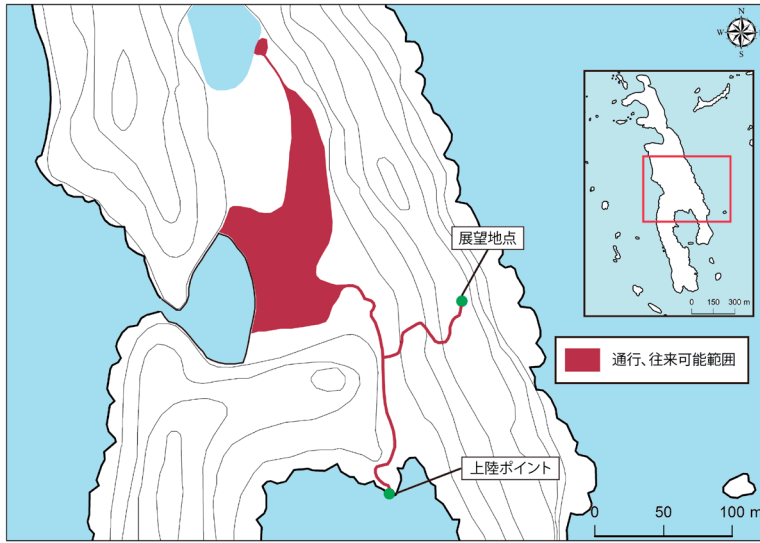


図 6 南島のツアールート



図 7 南島内の経路の様子 (2015年3月撮影)

ト以外の通行禁止」という制限が厳格に課せられている (図7)。南島への上陸直後にツアーガイドは制限があることをエコツアー参加者に対し説明する。また、経路を1歩でも踏み外したエコツアー参加者にはツアーガイドが注意することもある。「自然物の採取禁止」という制限に関しては、必ずしもツアーガイドから説明があるわけではない。エコツアー参加者が自然物を採取しそうになった時に注意する程度である。

「森山歩きツアー」はツアーガイドが運転する車で父島の森や山を数か所訪れるツアーで

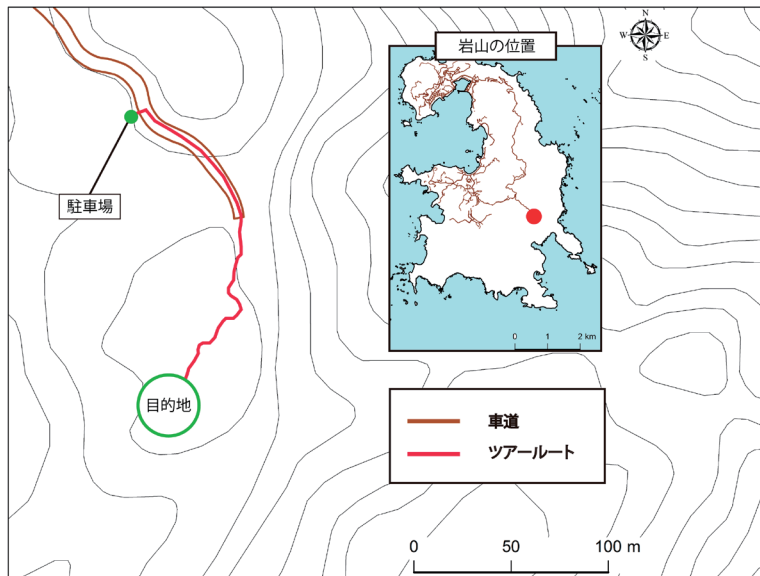


図8 森山歩きツアー「岩山」へのツアールート



図9 「岩山」の登山道（2015年11月撮影）

ある。訪れる場所はすべてが保護地域内というわけではない。本研究で対象とした2回のツアーではどちらも「岩山」と呼ばれる地域を訪れた（図8）。そのため、調査対象は「森山歩きツアー」全体ではなく、「岩山」を訪れた時のみである。「岩山」を訪れた際、「規定ルート以外の通行禁止」という制限は南島ほど厳格ではなく、一般的な登山道であるため規定ルートを外れることはない（図9）。また、「自然物の採取禁止」という制限は南島同様にあらかじめ参加者に注意を促されることはない。「外来種対策の作業」は先述の通り

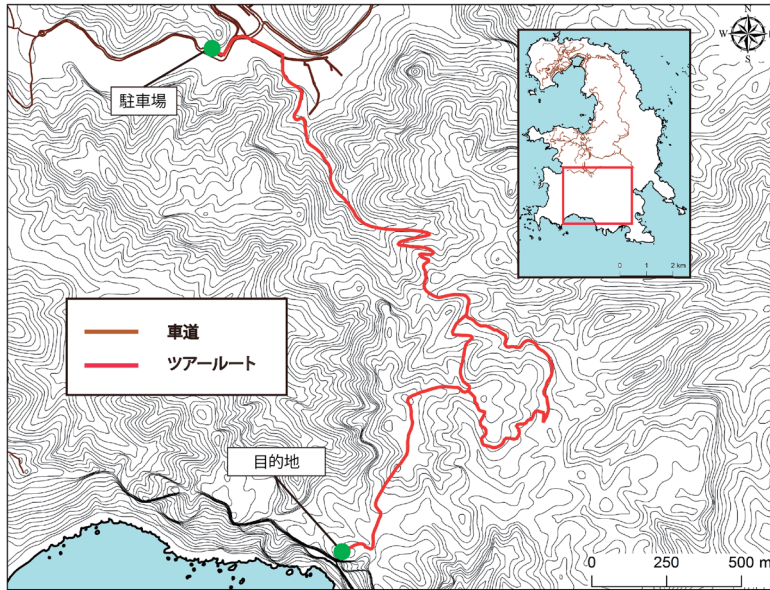


図 10 ハートロックツアーのツアールート



図 11 ハートロックからの景色 (2015年3月撮影)

(i) から (iii) までの作業がツアー参加者に課せられる。

「ハートロックツアー」は「ハートロック」という目的地を目指す1日がけのトレッキングツアーである(図10; 図11)。ツアーで歩く範囲は全域が森林生態系保護地域であり、ツアー全行程が調査対象である。「規定ルート以外の通行禁止」という制限は「岩山」と同程度であり、一般的な登山道であるため規定ルートを外れることはない。また、「自然物の



採取禁止」という制限は「南島」、「岩山」同様にあらかじめ参加者に注意を促されることはない。「外来種対策の作業」については先述の通り（i）から（iii）までの作業がツアー参加者に課せられる。

## 2. 心理的リアクタンス指標の選定

本研究で用いる心理的リアクタンスの指標と、心理的リアクタンスが生じる要因とされる指標について説明する。心理的リアクタンスには「感情的反発」と「行動的反発」の2種類がある。深田（2003）は「感情的反発」が「行動的反発」の要因になっていることを明らかにしている。「感情的反発」の指標はさらにいくつかのカテゴリーに分けられるが、深田・植田（1991）、坪田ほか（1992）、高本ほか（2005）を参考に「制限の認知」、「威圧感の認知」、「攻撃」、「感情的反応」を採用した。深田（2003）は「行動的反発」を「自由を回復しようと思うこと」と定義している。これは、心理的リアクタンスが「自由を回復しようとする動機の状態」であり、実際に行動するか否かを心理的リアクタンスの指標にできないからである。そのため、「実際に制限を守らないこと」の1歩手前である「自由回復意図」を「行動的反発」の指標とした。

以上5つの指標の質問項目は次の通りである。「制限の認知」の質問項目は「ガイドがこれらの解説をしたとき、自由に行動できないように感じた」である。「威圧感の認知」の質問項目は「ガイドがこれらの解説をしたとき、おしつけがましさを感じた」である。「攻撃」の質問項目は「これらの制限を定めた人に反感を感じる」である。「感情的反応」の質問項目は「ガイドからこれらの解説を聞いたとき、いやな感じがした」である。「行動的反発」の質問項目は「ツアー中、これらの制限を守ろうと思った」である。さらに、本研究では5つの指標に加えて「制限の必要性」という指標を加えた。「制限の必要性」の質問項目は「これらの制限は必要だ」である。

心理的リアクタンスが生じる要因として、深田・植田（1991）は「脅威の程度」と「自由の重要性」、深田（2003）は「自由の信念強度」と「自由排除の正当性」が要因となることを明らかにした。「脅威の程度」とは、客観的に判断された脅威の強弱のことである。本調査では3つのエコツアーによって、さらに3つの制限によって脅威の程度が違っていると仮定した。「自由の重要性」は、その人にとって制限された行為が重要であるか否かの程度である。「自由の信念強度」は、自分にある特定の自由があるという信念の程度のことである。「自由の信念強度」は「自由の期待度」などと言い換えることができる。「自由排除の正当性」は、制限を課すことが正当かどうかのことである。

また、以上の4要因に加えて心理的リアクタンスの要因となると筆者が仮説をたてた項

目を追加した。「制限を知った時期」は「レジャー行動の代用理論」を適用させたものである。これは Iso-Ahola (1979) が提唱したものである。Iso-Ahola (1979) は、「代用する必要が予期せずに起こった場合、予期していた場合よりも代用する意思は低い」ということを示した。つまり、代用する必要を事前知っていたら、観光客の代用意思が高まるということである。本研究はこのレジャー行動の代用理論を応用し、「代用意思が高い」を「リアクタンスが生じない」と言い換えた。さらに、「制限を知った時期」に加え、「エコツアー体験歴」、「エコツアー参加意欲」、「小笠原島歴の有無」、「性別」、「年齢層」を心理的リアクタンスの要因として考えられる項目に追加した。

### 3. 調査実施概要

本研究の調査は、対象としたエコツアーを催行しており協力の得られた「竹ネイチャーアカデミー」が催行するエコツアーで行った。「竹ネイチャーアカデミー」は父島でエコツアー事業を営み、調査当時は 5 名のガイドが在籍し、海域ツアー、陸域ツアーともにおこなっている。調査はエコツアー参加者に心理的リアクタンスに関するアンケートを配布することで実施した。アンケートはエコツアー参加者に宿泊施設に持ち帰ってもらったあと、後日「竹ネイチャーアカデミー」の事務所まで持参してもらうことで回収した。

調査は 2015 年 10 月 27 日から 2015 年 11 月 3 日に行った。アンケートの配布数と有効回答数は表 1 の通りである。上記の期間中に「竹ネイチャーアカデミー」で催行されたエコツアーは海ツアーが 5 回、ハートロックツアーが 2 回、森山歩きツアーが 2 回であった。そのため、ハートロックツアーと森山歩きツアーでのアンケート配布数は海ツアーより少なかった。アンケートの有効回答数は合計 30 部であった。そのうち海ツアーが 20 部、ハートロックツアーが 4 部、森山歩きツアーが 6 部となり、有効回答数は海ツアーが全体の 3 分の 2 を占めた (表 1)。

表 1 ツアーにおけるアンケート回収状況

ツアー名	調査実施回数 (回)	アンケート 配布数 (部)	アンケート 回収数 (部)	アンケート 回収率 (%)	有効回答数 (部)
南島	5	40	25	63	20
ハートロック	2	9	4	44	4
森山歩き	2	6	6	100	6
合計	9	55	35	64	30

### Ⅲ. 結果と考察

#### 1. 心理的リアクタンス生起の有無

表2に心理的リアクタンス生起の指標である6つの質問の結果を示した。アンケートの質問は(1)から(3)までの各制限に対して同じである。制限(1)は「規定ルート以外の通行禁止」、制限(2)は「自然物の採取禁止」、制限(3)は「外来種対策の作業をする」のことである。この表は表の左ほどリアクタンスが生じており、右ほどリアクタンスが生じていないレイアウトになっている。「自由回復意図」、「制限の必要性」、「威圧感の認知」、「感情的反応」、「攻撃」では3つの制限すべてでリアクタンスが生じた回答者はいなかった。一方、「制限の認知」は、制限(1)で「当てはまる」が17%、「どちらかといえば当てはまる」が13%、制限(2)で「当てはまる」が17%、制限(3)で「当てはまる」が17%と、リアクタンスが生じた回答者が存在した。「制限の認知」は2つの心理的リアクタンス

表2 制限における指標ごとの心理的リアクタンスの生起割合(%)

制限	指標	心理的リアクタンス			
		当てはまらない	どちらかといえば 当てはまらない	どちらかといえば 当てはまる	当てはまる
1	自由回復意図	0	0	3	97
2		0	0	10	90
3		0	0	3	97
1	制限の必要性	0	0	7	93
2		0	0	0	100
3		0	0	13	87
		当てはまる	どちらかといえば 当てはまる	どちらかといえば 当てはまらない	当てはまらない
1	制限の認知	17	13	7	63
2		17	0	17	67
3		17	0	13	70
1	威圧感の認知	0	0	7	93
2		0	0	7	93
3		0	0	7	93
1	感情的反応	0	0	3	97
2		0	0	3	97
3		0	0	3	97
1	攻撃	0	0	3	97
2		0	0	3	97
3		0	0	3	97

注) 制限1は規定ルート以外への侵入禁止、制限2は自然物採取禁止、制限3は外来種対策作業のことを示す。

のうち「感情的反発」であった。「行動的反発」である「自由回復意図」が生起しなかったこと、「感情的反発」5項目のうち1項目のみ生起されたことから、心理的リアクタンスは弱く生起されていたといえる。

## 2. 心理的リアクタンスが生じた要因

「制限の認知」が生じた要因を分析することで、心理的リアクタンスが生じた要因を分析した。

「制限の種類」によって「制限の認知」の生じやすさが違った(表3)。表3によると、制限(1)から(3)すべてで「森山歩きツアー」と「ハートロックツアー」は「南島ツアー」に比べて「当てはまる」と「どちらかといえば当てはまる」と回答した割合が大きかった。「森山歩きツアー」と「ハートロックツアー」は「南島ツアー」に比べて制限が認知されやすい、つまり心理的リアクタンスが生じやすいと思われる。「南島ツアー」での制限(3)「外来種対策の作業」は「森山歩きツアー」と「ハートロックツアー」より簡易的なものであったため、制限が認知されにくかったと推察される。しかし、制限(2)「自然物の採取禁止」の説明の仕方は3つのツアーとも同様であり、制限(1)「規定ルート以外の通行禁止」に関しては「南島ツアー」の方が「森山歩きツアー」と「ハートロックツアー」より厳しく注意が促されていた。そのため、制限(1)は「南島ツアー」において「制限の認知」が強まると予想したが、結果は異なった。

「エコツアー体験歴」によって「制限の認知」の生じやすさが異なった(表4)。表4によると、制限(1)から(3)すべてで「当てはまる」、「どちらかといえば当てはまる」と

表3 制限におけるツアーごとの制限の認知の割合(%)

制限	ツアー名	制限の認知			
		当てはまる	どちらかといえば 当てはまる	どちらかといえば 当てはまらない	当てはまらない
1	南島	10	15	10	65
	森山歩き	33	0	0	67
	ハートロック	25	25	0	50
2	南島	10	0	20	70
	森山歩き	33	0	0	67
	ハートロック	25	0	25	50
3	南島	10	0	15	75
	森山歩き	33	0	0	67
	ハートロック	25	0	25	50

注) 制限は表2と同じ。南島ツアー (n=20)、森歩きツアー (n=6)、ハートロックツアー (n=4)。

表4 制限におけるエコツアー体験歴ごとの制限の認知の集計結果（人）

制限	エコツアー体験歴	制限の認知			
		当てはまる	どちらかといえば 当てはまる	どちらかといえば 当てはまらない	当てはまらない
1	0回	5	3	2	10
	1回	0	0	0	3
	2～9回	0	0	0	3
	10回以上	0	1	0	2
2	0回	5	0	4	11
	1回	0	0	1	2
	2～9回	0	0	0	3
	10回以上	0	0	0	3
3	0回	5	0	4	11
	1回	0	0	0	3
	2～9回	0	0	0	3
	10回以上	0	0	0	3

注) 制限は表2と同じ。

表5 制限における性別ごとの制限の認知の集計結果（人）

制限	性別	制限の認知			
		当てはまる	どちらかといえば 当てはまる	どちらかといえば 当てはまらない	当てはまらない
1	男性	2	2	2	12
	女性	3	2	0	7
2	男性	2	0	3	13
	女性	3	0	2	7
3	男性	2	0	3	13
	女性	3	0	1	8

注) 制限は表2と同じ。

回答した人のほとんどがエコツアー体験歴が0回であった。エコツアーを体験したことがない人は、資源管理施策である行為の制限によって自分の行動が制限されているように感じやすく、エコツアーを体験したことがある人は自分の行動が制限されているようには感じにくいことがわかった。エコツアーを体験したことがある人は、参加したことがあるエコツアーでも同様に行為の制限を体験しており、エコツアーにおいて特定の行為が制限されることに慣れてしていると推察される。

「性別」によって「制限の認知」の生じやすさが違うことが示された（表5）。表5によると、制限（1）から（3）すべてで制限を認知しなかった回答者は女性より男性の方が多

表 6 制限における年齢層ごとの制限の認知の集計結果 (人)

制限	年齢層	制限の認知			当てはまらない
		当てはまる	どちらかといえば 当てはまる	どちらかといえば 当てはまらない	
1	若年	0	3	1	10
	中年	2	1	0	7
	高年	3	0	1	2
2	若年	0	0	3	11
	中年	2	0	1	7
	高年	3	0	1	2
3	若年	0	0	2	12
	中年	2	0	1	7
	高年	3	0	1	2

注) 制限は表 2 と同じ。若年は 20 歳以上 39 歳未満、中年は 40 歳以上 59 歳未満、高年は 60 歳以上。

く、制限を認知した回答者の割合は男性 (11 ~ 22%) より女性 (25 ~ 42%) の方が多かった。男性より女性の方が、心理的リアクタンスが生じやすいと考えられる。

「年齢層」によって「制限の認知」の生じやすさが異なった (表 6)。表 6 によると、制限 (1) から (3) すべてで「当てはまる」と回答した人に若年はいなかった。若年は「当てはまらない」と回答した割合が大きく、年齢が高いと制限が認知されやすいといえる。これは、マストゥリズムを数多く経験してきた高齢者は行為の制限を感じやすいためかもしれない。一方、若い人は学校教育で環境問題などを学んできた世代であり、エコツアーにおいて行為が制限されることをいとわない世代であるとも考えられる。

「制限の種類」、「エコツアー体験歴」、「性別」、「年齢層」によって「制限の認知」の生じやすさが異なることが明らかとなった。南島における制限より、森山歩きツアー、ハートロックツアーの方が制限が認知されやすく、心理的リアクタンスが生じやすいと推察できる。エコツアー体験歴がない人は制限を認知しやすく、心理的リアクタンスが生じやすいのかもしれない。性別では、男性より女性の方が制限を認知しやすく、心理的リアクタンスが生じやすいと考えられる。年齢層は高いほど制限を認知しやすく、心理的リアクタンスが生じやすいといえる。

一方、心理的リアクタンスを生じさせる要因になると仮定した「自由の重要性」、「自由の確信度」、「自由排除の正当性」、「制限を知った時期」、「エコツアー参加意欲」、および「来島歴の有無」は「制限の認知」の生じやすさに影響せず、心理的リアクタンスが生じる要因とはならなかった。

### 3. 心理的リアクタンスが生じなかった要因

「自由回復意図」、「制限の必要性」、「威圧感の認知」、「感情的反応」、および「攻撃」の5項目では心理的リアクタンスがまったく生じていなかった。心理的リアクタンスが生じなかった要因として、本研究で対象とした3つの制限では心理的リアクタンスが生じにくいことが考えられる。森山歩きツアーとハートロックツアーにおいては経路が一般的な登山道であるため、制限(1)「規定ルート以外の通行禁止」はエコツアー参加者にとって気になる行為の制限とはならなかったと考えられる。南島においては経路が厳格に定められていたが、南島上陸直後に経路を厳格に定めている理由をツアーガイドが説明していた。よって、エコツアー参加者にとっては制限の必要性を認識しやすく、制限に対して心理的リアクタンスが生じなかったと考えられる。制限(2)「自然物の採取禁止」は、エコツアー中にエコツアー参加者が自然物を採取しようとした時だけ注意をしていたが、その時にも必ず採取が禁止されている理由を説明していた。制限(1)と同様に、エコツアー参加者は制限の必要性を認識しやすく、制限に対して心理的リアクタンスが生じなかったと考えられる。制限(3)「外来種対策の作業をする」も制限(1)、制限(2)同様に、外来種対策作業をする理由を説明していた。エコツアー参加者は制限の必要性を認識しやすかったと考えられる。また、外来種対策の作業はエコツアー参加者が自らする参加型の活動である。そのため、義務感で作業をするのではなく、エコツアー体験の一部として外来種対策の作業をおこなうため、心理的リアクタンスが生じなかったと考えられる。

小笠原諸島のエコツアーであったことも、心理的リアクタンスが生じにくかった要因になったとも考えられる。小笠原諸島は世界自然遺産に登録されている。世界自然遺産は自然資源の保護と保全を目的とした登録制度であるため、小笠原諸島の自然資源は保護や保全をすべき対象であると一般に認識されている。よって、行為が制限されても仕方がないと観光客は行為の制限に対して理解を示しやすくと考えられる。また、小笠原旅行の希少性が高いことも心理的リアクタンスの抑制の要因になっていたと考えられる。小笠原諸島への交通手段は6日に1回の定期船しかない。そのため、最低でも連続6日間の休暇が必要であり、社会人にとって小笠原旅行の希少価値は高い。また、24時間の船旅で船酔いになる人も多く、観光客は船でのアクセスに苦勞する。小笠原諸島へのアクセスが船に限られており、本土から隔離されていることで小笠原旅行の希少性が増している。旅行の希少性が高いと、そこでの旅行への期待値が高まる。よって、観光客は小笠原旅行での体験はいいものに違いないと期待し、行為の制限などの負の側面を美化していることも考えられる。

#### IV. おわりに

本研究では、エコツーリズムにおいて心理的リアクタンスが生起されているか否か、そしてその要因が何であるかを明らかにすることを試みた。小笠原諸島でおこなわれているエコツアーを対象としエコツアー参加者にアンケート調査をおこなったところ、心理的リアクタンスの6つの指標のうち「制限の認知」のみで一部の参加者にリアクタンスが生じていた。しかし、6つの指標のうち5つでは心理的リアクタンスが生起されていることは示されず、「制限の認知」のみで弱い心理的リアクタンスが生じていた。「制限の認知」が生じていた要因は「制限の種類」、「エコツアー体験歴」、「性別」、「年齢層」であることが示唆された。エコツアー体験歴がない人、女性、40歳以上の人などには通常の解説ではなく、行動が制限されているように感じにくい解説を工夫する必要があるといえる。

一方、「制限の認知」が生じる要因とならなかった項目は「自由の重要性」、「自由の確信度」、「自由排除の正当性」、「制限を知った時期」、「エコツアー参加意欲」、「来島歴の有無」であった。「制限を知った時期」が「制限の認知」を生じさせる要因とならなかったため、ツアー前や旅行前に行為の制限があることをエコツアー参加者に伝える必要がないともいえる。ツアー参加前にエコツアー参加者に行為の制限があることを伝えることはツアーガイドの負担になるため、現状通りエコツアー中に行為の制限があることを伝えるのが合理的といえる。

また、6つの指標のうち5つでは心理的リアクタンスが生じなかった要因として、行為の制限の理由が説明されていたこと、外来種対策の作業がエコツアー体験の一部となっていたこと、小笠原諸島が世界自然遺産に登録されていること、小笠原旅行の希少性が高いことなどが考えられた。小笠原諸島が世界自然遺産に登録されていること、小笠原旅行の希少性が高いことは、他のエコツーリズム地域には必ずしも適用できるとは限らない。そこで、他のエコツーリズム地域で資源管理施策の導入を検討する際には、行為の制限の理由が説明されていたこと、外来種対策の作業がエコツアー体験の一部となっていたこと、が参考になるかもしれない。ツアーガイドが行為の制限の理由を説明するツアーは、ツアーガイドの養成に力を入れればどのエコツーリズム地域でも用意することができる。また、外来種対策の作業に関わらず、行為の制限をエコツアー体験の一部とする参加型のエコツアーを作成することも考えられる。

#### 謝辞

本研究の調査にあたり、竹ネイチャーアカデミーの代表、竹澤博隆氏には、エコツアー参加者にアンケートを配布すること、エコツアー中にICレコーダーでガイド内容を音声記



録すること、ツアー軌跡のデータをGPSロガーで取得すること、調査対象となるエコツアーに筆者が同行することを無償にて許可していただきました。また、竹ネイチャーアカデミーのガイド、武田氏、川口氏、望月氏、矢田部氏には、ICレコーダーとGPSロガーの操作、エコツアー終了後の参加者へのアンケート配布をしていただきました。また、竹ネイチャーアカデミーの系列店であるハートロックヴィレッジ、ハートロックカフェの竹澤睦子氏をはじめとするみなさまには、配布したアンケートを参加者から受け取るとなどのサポートをしていただきました。竹ネイチャーアカデミー、ハートロックヴィレッジ、ならびにハートロックカフェのみなさまに厚くお礼申し上げます。

## 文 献

- Brehm JW (1966) *A theory of psychological reactance*. New York: Academic Press. 135p.
- 深田博己 (2003) 心理的リアクタンスに及ぼす自由侵害の正当性と合法性の効果. 広島大学大学院教育学研究科紀要 52: 178-188.
- 深田博己・植田智 (1991) 進路決定場面における教師に対する生徒の反発反応. 広島大学教育学部紀要 40: 95-102.
- 今城周造 (2009) 「絶滅の危機」情報が説得効果に及ぼす影響: リアクタンス理論からの検討. 説得交渉学研究 1: 51-59.
- Iso-Ahola SE (1979) Some socialpsychological determinants of perceptions of leisure : Preliminary evidence. *Leisure science* 2: 305-314.
- 高本雪子・吉見恒平・深田博己 (2005) リアクタンス特性尺度の検討. 広島大学心理学研究 5: 51-68.
- 坪田雄二・深田博己・周玉慧 (1992) 母親の言語的脅威に対する児童の心理的リアクタンス. 広島大学教育学部紀要 41: 49-56.
- 山田菜緒子 (2005) インタープリテーションの背後にある理論: 自然資源管理に効果的となりうる理論的説明. 野外教育研究 9: 33-43.